

平成30年度 三文豪月間事業

映画で楽しむ 《金沢三文豪の世界》

【上映日程】

- ◆ 『日本橋』 10月13日(土)、16日(火)、19日(金)
- ◆ 『縮図』 10月14日(日)、17日(水)
- ◆ 『杏っ子』 10月15日(月)、18日(木)

【上映時間】

各回 午後0時40分から

【会場】

シネモンド (香林坊東急スクエア4階)

【入場料】

1,000円 (当日券のみ)

主催：公益財団法人 金沢文化振興財団

『日本橋』

昭和 31 年（1956）（大映）35 mm

監督：市川崑

原作：泉鏡花『日本橋』

出演：淡島千景、山本富士子、若尾文子、
品川隆二、船越英二、柳永二郎 ほか

【解説】

日本橋芸妓・清葉きよはに行方知れずの姉の面影を重ね、募る思慕を打ち明ける医学士・葛木晋三かつらぎしんぞう。しかし、既に決まった旦那もある身ゆえ…と清葉に拒絶された葛木は、その帰り道、日本橋の一石橋で同じく芸妓のお孝こうと出会う。清葉への対抗心からか、彼女に思いを寄せる男を次々に籠絡していたお孝。もとは海産物問屋だった五十嵐伝吾いがらしでんごもお孝のために破滅した一人だが、葛木に夢中になっていくお孝の様子に耐えきれず、とうとう葛木にお孝と別れるよう迫る。伝吾の深い執心に打たれ、お孝の前から姿を消す葛木。しかし、すでに葛木が無二の存在となっていたお孝の心は、次第に狂気に蝕まれていく。

かつての華やぎが嘘のように落ちぶれたお孝と、そんな彼女を姉芸者として慕い、寄り添い続ける妹分のお千世ちせ、そして二人を見守る清葉。一年後の夏、清葉の家に近火の危機が迫る中、再会を果たした彼らの恋の結末は――。

原作は日本画家・小村雪岱こむらせつたいの装幀家デビュー作として知られる鏡花の“花柳もの”の代表作『日本橋』。大正3年に鏡花の知友・堀尾成章ほりおせいが起こした千章館せんしようかんから書き下ろし出版、大正4年の初演時には葛木を伊井蓉峰い いようほう、お孝を喜多村録郎き たむらろくろう、清葉を木村操きむらみさお、お千世を花柳章太郎はなやぎしょうたろうが演じ、章太郎の出世作となった。以降、たびたび舞台化・映画化されており、2019年1月には新派による東京・三越劇場での上演が決まっている。

『縮図』

昭和 28 年（1953）（新東宝）35 mm

監督：新藤兼人

原作：徳田秋聲『縮図』

出演：乙羽信子、山田五十鈴、山村聰、
日高澄子、宇野重吉、北林谷栄 ほか

【解説】

原作となった『縮図』は、昭和 16 年 6 月～9 月、「都新聞」（現「東京新聞」）に 80 回連載された長編小説。秋聲が晩年に交流をもった芸妓をモデルに描くもので、太平洋戦争開戦間近との状況下、花柳界を描くことそれ自体が不謹慎として当局から度重なる圧力を受け、「妥協すれば作品は腑抜けになる」と自ら筆を折った未完の傑作である。昭和 18 年の戦中に秋聲は亡くなり、長男一穂らが単行本化を試みたが空襲により二度までも本文その他が焼失。戦後、奇跡的に残った見本刷りを元に、新聞未掲載の 2 回分を加えて未完のまま刊行された。

新藤監督は終戦直後に本作の映画化を思い立ったが誰も賛同する者がなく、近代映画協会設立後「ようやく」との思いで制作に着手したという。作品の舞台を辿って入念にロケハンをおこない、戦後間もなくあちこち焼けてしまった土地と似た地域を選んで撮影を敢行。東京芳町の場面は白山で、千葉蓮池の場面は土浦で、またヒロイン銀子が住み替えをする宮城県石巻は設定ごと越後高田に置き換えられた（新藤兼人著『シナリオ修業』より）。原作の魅力について新藤は「生きた人間を描く、点にあると語り、それを再現するため従来は背景の撮影用に使用される小型のベビークレーンを「人間本位にレンズがまつわりつく、ような型破りの方法で駆使し、こだわりの映像をつくりあげたという（新藤兼人著『青春のモノクローム』より）。

『杏っ子』

昭和 33 年（1958）（東宝）35 mm

監督：成瀬巳喜男

原作：室生犀星『杏っ子』

出演：香川京子、木村功、山村聰、
三井美奈、加東大介、太刀川洋一 ほか

【解説】

東京新聞に昭和 31 年（1956 年）11 月から翌年 8 月まで 271 回にわたって連載された「杏っ子」は、犀星文学の集大成として高い評価を受けベストセラーとなった。社会的な名声をもつ父とその娘、そして娘と結婚したダメ男を中心にして展開される家族の物語は、自伝的な要素の強さもあって深い共感と興味を読者に与えた。

この読売文学賞受賞の傑作を文芸物の得意な、なかでも男に尽くす女を描いてはぴか一の成瀬巳喜男監督がメガホンを握った。脚本は監督と田中澄江が筆を執っている。すでに製作後 60 年経った。同監督の「あにいもうと」（昭和 28 年（1953 年））と共に映画史上に残る名作となっている。

見所はいくつもあるが、例えば杏子の父が丹精を込めた庭を、杏子の夫と弟が共同して破壊する場面。父と息子、婿と義父のどうしようもない確執をえぐりだして、なんともやるせないものがある。それ以上に杏子夫妻の救いがたい地獄絵図は、戦後の混乱がまだ収束しない世相の中で描かれることも相まってこの上なく傷ましい。

しかも杏子は生活の苦しさに打ちひしがれることなく、自らの置かれている現実に向き合っていてゆくのだから立派である。演ずる香川京子の微笑を試写会で見た犀星は「その微笑しかけようとする間際の眼を大変美しいものに思った。」とその所感を書きとめている。